

# 受領官と在庁官人

胆沢城を中心に、奥六郡の支配・統治が行われたことは間違いない。渕原智幸さん（元京都大学非常勤講師）の説でも、遠い多賀城から支配したのではなく、多賀城から官人が胆沢城に派遣されてきて、そこで支配を行ったのだと説かれている。胆沢城が、奥六郡の支配の拠点になったことは間違いない。

が、いわば出張所として勤務し、奥六郡を支配したと考えた。その中で安倍氏が登場してくる。安倍氏が、胆沢鎮守府の在庁官人だったということは、いわば定説化しているが、安倍氏がどういう理由で登場したのか。そして、どういう立場で、のちに奥六郡の主と呼ばれるような地位についたのかということが問題になる。

ここで、二つの言葉の意味を説明しておきたいと思う。一つは「受領官」という言葉。もう一つは「在庁官人」。この言葉の意味を、私がどういう意味で使っているかを申し上げておく。

まずは「受領」。受領というのは、現地に赴く役人のこと。特に9世紀以降、任地に赴いた国司が受領と呼ばれるようになった。

受領として赴任した国司の話は、今昔物語集などに出てくる。「倒れる国司はわらをもつかむ」は、国司は転んでもただでは起きないという例え。中央から赴任してきた国司は、受領と呼ばれ、在任期間中その土地から搾りに搾り取っていった。

奈良時代は、すべて中央から国司が下向してきた。しかし、奈良時代に下向してきた国司は、受領とは呼ばない。どうしてか。律令制ではどの役

## 金ケ崎の国指定史跡

# 鳥海柵を知る

2

— 2014 シンポジウムより —

大平 聡氏 (宮城学院女子大教授) 基調講演

## 「鎮守府胆沢城から鳥海柵へ」 II

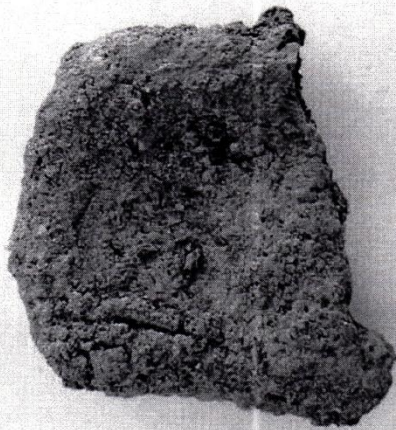
ところが、9世紀以降の受領と呼ばれる国司は、1人にすべての監督権限が委ねられてきた。前任者から、その地域の監督権限を全部受け渡される。任期があるので、任期が終わるとそれを次

の国司にバトンタッチしていった。

つまり国司が、その国の政治を一手に握ってしまふということ。かつては4等級に分かれて、それぞれ自分の役割分担を担っていたのが、すべての権限が一手に握られてしまふ。そのような国司を受領と呼ぶようになった。

この時代になると受領たちは、自分の手足となって働く部下が必要になり、都から部下を引き連れてくるようになった。事務処理能力にたけた優秀な役人や、腕っ節が強い用心棒のような者など、自分の意のままに使える部下を連れてきた。彼らは現地に入り込み、受領の指示に従って税を取り立てていった。

税の取り立て方も変わっていった。奈良時代の国家は、戸籍を作り、登録された一人一人に田地を与え、租税を取り立てた。9世紀に入ると方針転換され、田畑の面積に応じて税金を掛ける方法に変わった。



縦街道南区域で見つかった平安時代(11紀中期以前)の鉸具(かこ)。帯の留め金具(革製のベルトに装着したバックル)で官吏の象徴の一つ。右写真はX線写真

